



アバンに異変が起こったのだと、まず知らせてきたのはポップだった。

ヒュンケルがたまたま通りがかった街で、たまたま街を荒らしていた盗賊を倒したことで名が広がり、その結果、ポップの元まで一番弟子の居場所が知られたらしい。

ルーラでヒュンケルの前に現れた弟子は、悲壮感を隠そうともせずに、いきなり手を掴んで来たかと思えば瞬間移動の呪文を唱えた。

視界が光で覆われたかと思えば、ほどなくして足に衝撃が伝わる。相も変わらず荒い魔法だった。

自分に何の説明もせずに強引に連れ出されたことに、ヒュンケルは文句を言おうと声を上げようとすると、相手の方も彼が言わんとしたことが分かったのだろう、潔く頭を下げると必死の体で話し出した。

「いきなり、何の説明もしねーで連れてきたことは謝る。でも、言葉よりも現物を見たほうがオメーには早いと思っただよ——だって、アバン先生が……おれたちのアバン先生が！」

いつもは軽い空気を纏わす一番弟子の苦悶を含めた声、ヒュンケルの思考を一気に染めたのは「アバン」という名前だった。

「アバンが、アバンがどうしたというんだ！」

「だから、言葉じゃなく実際に目で確認する方が早ええ、って」

言うどポップはヒュンケルを先導するように一目散に走り出していた。ヒュンケルは気がついて回りを見てみれば、そこは見覚えのある風景——カール国の王城の一角であることが分かる。

ポップの後を追って急いで走り出したヒュンケルの脳裏に悪い予想ばかりが浮かんで消える。

ベッドの上に横たわった恩師の姿、その顔は穏やかだと思えば、次の瞬間には

苦渋に満ちる。何者かに囚われ、手足を縛られて脂汗をにじませている姿、もしくは闇に飲み込まれ、不吉な笑いを張り付かせて家臣たちを足蹴にしている姿。どれをとつても喜ばしいものではない。

徐々に心臓の鼓動が早くなり、同時に重苦しいものが喉の奥へと詰まって叫び出そうとしている。不穏な思いを胸に弟弟子の後を追っていけば、ポップはアバンの私室へと飛び込んで光差し込む方向へと走るのをやめて、ゆっくりと歩み出した。

「——ポップ」

「驚かねえで見てくれよ。これが、今のアバン先生だ」

白いテーブルと椅子が置かれたバルコニーには光が降り注ぎ、白い陶磁のカップを輝かせている。

その繊細な形のカップを手にはしているのは、青みがかった銀髪に白い頬の嫩やかな姿の——間違いなくアバンだった。アバンはオレたちの姿に気がつくと思

み、緩やかな笑みを唇に刷いた。

「おや、久しぶりですね、ヒュンケル。ちようどお茶にしようと思っていた所なんですよ。貴方も一緒にどうですか？」

何もかも光が眩いばかりの風景に、一瞬、息を飲む。

アバンはヒュンケルの驚く顔など気がつかないとも言うように、手元にある紅茶の缶を手にとって見せた。

「今年取れた茶葉で作った逸品ですよ。口の中で含めると深い香りが広がって、幸せな気分になれるんです」

そう笑ったアバンの背に、白鳥に似た白い羽が広がる。――まるで天使だ。

「クッキーもね、焼きたてですよ」

まるで宗教画から抜け出たような場面に、ヒュンケルは背後に控えていたポツプに振り返って見せると、弟子の深刻な顔は変わらない。

手放して喜ぶ場面ではないのだと分かって、ヒュンケルは神妙にうなずいた。

「そうですね。どうやら長い話になりそうだ。まずは紅茶を飲みながらも、先生の背に生えた羽は何か教えてもらいましょうか？」

「ええ、構いませんよ。ちゃんと話をするためにも椅子に腰かけて下さいな」

「そうさせてもらおう」

オレはアバンが示す椅子へと腰かけると、無言でポップもオレの隣へと腰かける。

「まずは、経緯から聞かせてもらえますか？」

「ん——、そもその切っ掛けはダイクンの行方を追って竜騎士の神殿へと足を踏み入れた時なんですよ」

アバンは言いながらも手は止めない。よどみない手は四角い缶から茶葉を木匙で取り出して、ポットへと注いでいく。

「あの時、神殿に飾られた大きな玉に一瞬、意識を奪われたんですが、気がつけば私の目の前には天界らしき人物が現れました」

白のゆつたりとした衣装に身を包み、その背には大きな羽が生えていたとアバンはにこやかに笑う。

「天界人は二人いて……でも、実際に私に語り掛けていたのは彼女——いや、彼かも知れませんが、天界人の背後にいた存在です」

その存在からアバンは気に入れられ、是非とも天界に迎え入れたいと言うのだ。

「そこですんなりと受け入れたんですか？」

「まさか。まだまだ冥竜王との戦いは続いていましたし、終戦しても私には国内の再建という仕事があり、人々の繋がりがあつた。それを断ち切つてまで天界に行こうとは思いませんでしたよ」

「ならば」

「そう言うよね、急ぐ必要はない、国での役目が終わったらでいいこと、私が今生との人々との繋がりを捨てる代わりに、魔界と地上との扉を封印して魔物が行き来しないようにすると言われました」

「魔界の連絡路を封印！？ そんなことが出来るのか」

「ええ、今、地上にいる魔物は魔界へと返すことは出来ませんが、地上への道筋を封印する事が出来れば、今以上に魔物は増えることはないと言われまして」

アバンはにつこりと笑ると、弟子二人の前に紅茶が注がれたカップを置く。

「これ以上、魔物が増えない、つまりは人に害する魔物を撲滅する事が出来るんですよ」

これに真っ先に異を唱えたのはポップだ。

「だから！ 魔物なんか出てきたら叩きやあいんすよ。その為に何百年と受け継がれたワザと知恵があるんすから」

「でも、その為に消えていく命がある。私はそれを失くしたいんです」

「だからって……先生が、先生が犠牲になることないだろ！」

「犠牲？ いえいえ、そんなことはありませんよ？ ポップ。私は嬉しいんです。だって、天界にいったら寿命なんて概念がなくなるんです。つまりは永遠の命が

手に入るんですよ。何でも天界には始終美しい音楽が流れ、人々は優しく穏やかで、地上では口に出来ないような美味な食べ物が毎日、食べられるとかで」

「永遠の命——貴方が、そんな陳腐なものを欲しがるとはオレには到底思えないのだが」

重々しい、一番弟子の聲がアバンの話を遮る。

「貴方は最初、天界人の誘いを断ったのに、その意思を翻して天界人の言葉に従ったのは、交換条件が余りにも良かったからだ。魔界と地上との道を封印するという」

「そ、そうだよ！ 先生！ おれたちの為に先生は……。先生だって天界には行きたくないんじゃないかねーのかよ！」

その時、大人の白鳥程度の大きさはあろうかという白い羽が広がり、アバンの眼鏡の奥の瞳が冷たく彩られた。

「——時が過ぎれば、人の心など変わりますよ、ポップ。貴方だって、この数

年で大人と混じり合い、政治という化け物と顔を突き合わせて分かっているでしょう？ 私ほね、大勇者と崇められて王配となった五年間で、嫌というほど人の本性に付き合わされて嫌になったんです」

「せんせえ」

「ここらで世界を一度救い、その後、何度も救世主をカバーした立役者としての業績を認めてもらって、これからは楽隠居させていただきたいんですよ」

「ということは、一度は断った話を貴方は受け入れたんですね」

「ええ、ダイくんが冥竜王を倒した晩に、私の夢の中に天界人が出てきたんですよ。心変わりはないか、とね。そこで約束したんです。貴方たちの世界に移りますとね」

アバンはにつこり笑うと赤い液体で満ちたカップを持ち上げ、立ち上る香りを嗅ぎながら口をつける。

「凄いでしょ。天界人って気難しい印象ですし、一度断りを入れられた相手に再

び逢いに来てくれるだなんて、破格の待遇ですよ」

だから、もうこれは決定事項なのだとアバンは言う。

「別れの時間までくれたんです。これ以上は何も望みませんよ」

言い終わると同時にバルコニーの一面に軽い衝撃音が鳴り、ヒュンケルが振り返ってみるとダイとレオナの姿があった。

「アバン先生！」

「ポップくんから聞いた話、本当なんですか！？」

二人ともにアバンの背中に映えた翼に一瞬だけ怯んだ後に、傍に駆けよると異口同音に天界への遷移を反対したが、用意された紅茶の香りとクッキーの甘さ、それに柔らかなアバンの話術で丸め込まれて有耶無耶になってしまう。

「それはそうと、二週間後には私は天界に行きますが、それまではここで一緒に暮らませんか？」

アバンから出された提案に、ダイ、ポップ、レオナの三人は勢いよく返事を返

し、ヒュンケルは渋々とだが黙ってうなずいた。

ほどなくしてマアムもアバンの元へと現れたが、大粒の涙を流して地上に残って欲しいと懇願する彼女説得も徒労と帰した。

何をして欲しいです？ というアバンの言葉に、ダイは勉強を教えて欲しいと言った。

「貴方なら、天界人に何でも教わっているでしょうに」

「はい。あの頃、ひらがなしか読めなかったおれは、天界で色々学びました。けれど、あの人たちの言葉は抽象過ぎて——地上の事は分からないと言われたんです」

「では、ダイくんには私が知見した世界のことをお話しましょう。レオナ姫は」
アバンの問いにレオナは少しだけ頬を染めた。

「あの、その……私でも作れる簡単な料理とか教えて欲しいです」

「はい、じゃあ、姫には料理を。マームはどうしますか？」

「あ、あの、その前に母さんに会って欲しいんです。本当に天界に行ってしまうのなら」

「ああ、勿論、レイラには逢いましょう。そう言えば、ロカのお墓にも最近、行ってませんでしたね。これはウツカリしていたなあ。思い起こさせてありがとう。でもね、それとは別に何か私にして欲しいこととかないですか？」

「魔弾銃を――あれは、魔法が使えない人でも戦えるし、回復にも使える道具だから」

「うーん、必要ですかね。私が天界に行けば魔物は出なくなるんですよ？」

「でも、魔界に帰れなくなった魔物は地上に残っているんですよ」

マームの言葉に成程とアバンは手を打つと、必ず魔弾銃の設計図は残すと約束をした。アバンの手ずから作って欲しいとマームは言い募ったが、魔弾銃を作る

ほどの時間がないと申し訳なく頭を下げられて、マームは諦めるしかなかった。

「ポップは？」

アバンの問いかけに、最初は頬を膨らませて不機嫌そうにしていたが、ぼそりと『世界中に散らばっているという伝説の魔道図書館を見つけて欲しい』というもので、それこそ時間がないとアバンが言くと、何でも言うことを聞くって話じやなかったのかよと大声を張り上げた。

「ポップのそれって、目的と手段が入れ替わっているでしょう？」

アバンの言葉にポップはハッと、唇を噛む。

「だから駄目なんです」

言うところぼろと泣き出した、共に過ごした時間が一番長いだろう弟子の頭を、幼子にやるようにして撫でてやった。

結局、ジニユール家にある膨大な書物を受け継がせること、これまでに得た秘法を伝授することでポップは納得するしかなかった。

「貴方はどうします？」

とうとう自分に順番が回って来たところで、ヒュンケルは不機嫌なさまを隠そうともせずにアバンと向き合う。

「そうやって、弟子も貴方と関わってきた者の笑みを曇らせてまで行く価値があるのか？」

「ヒュンケル」

「人の命の儚さ、だからこそ尊く受け継いでいくことに意味があるのだと説く貴方が天界に興味があるとは思えん」

「言ったでしょ。人は変わるものだって」

「ならば、オレが納得できるまで、オレは貴方の傍を離れないでいよう」

ヒュンケルの提案にアバンは目を見開き、すこしだけ口ごもる。

「オレは魔法が使えないから貴方から魔法を教わることはないし、武力にしてもオレの方が強い。料理もまあまあオレ一人で生きる分には十分な知識がある。そ

うなるとオレが望むのは貴方の真意が知りたいだけだ」

「私の、真意」

「貴方は嘘を吐くのが上手いが、一步引いて俯瞰から見れば分かることが十二分にある」

「なんていうか、褒められているようで貶されていませんか？ 私」

「気のせいですよ」

「そうですか？」

「兎に角、オレの求めるものはそれだけだ」

「真意と言われましても、私が天界に行きたいのは本当です。だって天界ですよ、天界！ 福利厚生潤沢！ 死とは無縁の人生！ 美味しい料理に地上では得られない書物の数々が読み放題！ 時間もたっぷりあるから幾らだって探究出来ますし」

鼻高々に話を並べるアバンだが、鼻白むように見返すヒュンケルには届かない。

「兎にも角にも、今の時点から貴方の傍から離れませんので」

望むことを叶えると言った以上、ヒュンケルの望みを退けることは出来なくて、アバンは仕方なくうなずいたが、彼の耳が赤くなっていたことに気がつく者はいなかった。

ダイに世界の成り立ちを、レオナに料理を教え、ネイル村に飛んでレイラに再会するとロカの墓へと花を手向け、忙しい合間を縫って魔弾銃の設計図を作り、ジニユール家に寄って書物の目録を作り上げる。

「実際、天界なんかに行ってほしくねーからって、無茶言い過ぎたかな、おれ」
ジニユール家の書庫に立ち入ったポップは、溜息をつきながら横に立った兄弟子へと言う。

ふと、目線を上に上げれば、首が痛くなるほどの天井がある書庫に、これまた天井まで届いた書棚を脚立を使い、熱心に見つめているアバンがいた。

「誰もアバンの天界入りなど受け入れる筈もないからな。こうまで言えば諦めてくれるのではないかと考えるのは仕方がない」

「それにしたって……こうまでアバン先生の時間を奪うことになるとは思わなかったんだ」

「それもアバンにはお見通しだろう。分かっている引き受けたのだから、責はアバンにある」

でもよ、と後悔しきりのポップの目の前で脚立の上に座るアバンの体がぐらつくのが目に入った。

「先生!?!」

落ちると思った瞬間、ポップの体が自然と動いた。飛翔呪文を唱えて落ちてくる体を受け止め、そのまま落下すると両足を地面へと叩きつけた。

一瞬、ポップの表情が疑問を含んだ驚愕へと代わり、駆け寄ってきたヒュンケルへと意味ありげな目付きとなる。

「ポップ、どうした」

「オメー、四六時中、先生の傍にいらって言ってたよな」

「ああ、その通りだ」

「だったら、どうしてアバン先生の体がこうも軽いんだ！？　これ、メシ、食つてねーだろ！」

「いや、アバンは一旦三食、残さずに食事をしているが」

「これが三食ちゃんと食べている奴の重さかよ！　こう言っちゃ何だが、おれは魔法使いの中でも貧弱だからな！　アバン先生を抱え上げることなんて本来出来ねーんだよ！」

ヒュンケルに食って掛かるポップを止めたのはアバンだった。

「ちよ、待つて、待つてください。ヒュンケルの言うことは本当ですよ、ポップ。私はちゃんと三食食事してますって——って、話の前に下ろしてもらえますか？」

苦笑いを浮かべるアバンに、少しばかり不満げな顔を浮かべながらもポップは師を床へ下ろすと、やれやれとばかりにアバンは苦笑いを浮かべると、白い羽を大きく広げた。

「ちゃんと食べてはいます。でもね、体重は徐々に減っているんですよ」

「え、それって……何か重大な病の兆候かしんねーっすよ」

「ないです。体重が減っているのはね、飛ぶためなんです」

飛ぶ？ とは。

ヒュンケルとポップは同時に同じ疑問を口にした。

「だって、このままじゃ体が重すぎて、この羽では飛べないでしょ？」

アバンの言葉にヒュンケルの眉間に深い皺が寄った。

「飛ぶ、ということは。実際、貴方が飛んで天界に行くということか」

「ええ、天界へ旅立つ日に道しるべが示されますが、それは空にあるんですよ。

飛ぶためには、今の私の体重じゃ無理なんです。実際、脚立から落ちてしまいましたしね」

ゾクリ、とヒュンケルの背に冷たい震えが走る。脳裏にはガルダンディという昔、仲間だった男が思い浮かぶが、背に大きな羽を持っていた彼も、確かに異常

なほどに体の軽さを自慢してた記憶がある。

（もうすでに、アバンの体の中で変化が起こっている）

それは引き戻せない事象のような気がして、手を打つのが遅すぎたのではないかと懸念が走った。

大した事ありませんよ、と言い、アバンはもう一度書棚へと向かうが、一旦、足を止めて振り返らずに言う。

「ヒュンケルとポップ。貴方はアバンの使徒の中では兄として、半ば指導者としての役目を担っています。だから言うのですが——私の体が軽くなる度に私からは記憶が消えていきます」

重苦しい事実二人は一瞬、押し黙る。

「そうでなければ、私の体は軽くならないのですから仕方ありません」

言うアバンはくりと振り返った。

「実を言うと、もう、ダイクんの記憶が殆どないのですよ。私にとってのダイク

んは大魔王バーンを、その後は冥竜王ヴェルザーを倒した勇者という『記号』に過ぎないのです。だからこそ、私はダイとレオナの願いを先に叶えたんです」

声を張り上げたのはポップだった。

「だから、天界なんかに行くのはやめましょうって言ったんだ！ 今からでも取りやめに出来ねーんすか！」

「無理ですねえ、この羽が生える呪いを受けた瞬間から、私は半ば天界の住人なんです」

「――アバン」

「おそらく、私と一緒にだった時間が短い者から記憶が消されていくのでしょう。彼らを悲しませてしまうのは目に見えていますから、その時はよろしくお願いしますね」

「その理論から言えば、妻である女王陛下が一番、記憶の保持が長いだろうに、何故、彼女に頼まない？」

アバンはヒュンケルと向かい合うと、少しだけ寂しげな表情を浮かべた。

「もう、すでに私は彼女に顔向けが出来ないのです。あの日、キミたちを城に招いた日から私は出奔者として、王配に相応しくない人物として城に立ち入ることは禁止となっているんですよ」

「――それではっ！」

「最期はここで――ジニユール家の城から旅立ちます」

だから、ポップ。とアバンは床に座り込んで不貞腐れた表情を浮かべる弟子へと言った。

「色々をお願いすることがあると思うのですが、その時はよろしくお願いしますね」

「――伝書バト宜しく使う気っすか？」

「まあ、そうなりますね。キミが二番目に付き合いの時間が長かったですし」

「なんせ、不肖の弟子っすから。やっと卒業出来た時も仮でしたし」

「そんな嫌味言わないでくださいよ。それに私は一度足りとて貴方を不肖の弟子
とか思いませんでしたよ」

ポップとアバンのやり取りを見ながら、ヒュンケルは一年という言葉を噛み締
めていた。

（オレとアバンの出会いは一年で終了した。ならば、オレの事をいつまで覚えて
もらえるのだろうか？）

いつまで？

いつ、忘れ去られる。

あの日、憎しみという形ではあったが、十五年余りもの間、貴方を思い続けた
自分をアバンは忘れるというのだ。こんな酷い仕打ちはないと握った手の平を血
が滲むほどに握りしめたが、自分にアバンを責める資格などないのだと言い聞か
せた。

次の日、ジニユール家の城の中で黙々と作業するアバンの背中へと声を掛けた。

「ダイの奴に先生の事を話したら、これから来るっつーんすけど」

「ダイ？」

脚立の上にいるアバンは首を傾げると、その上から羽を広げるとポップの目前へと音も発たせずに羽ばたいて降りてきた。

「誰です？ キミの友達かな？」

昨日よりもアバンの体は軽くなっていた。

一日、一日と憂鬱な日々は過ぎていく——アバンを除いて。

彼は魔弾銃の設計図を書き上げると、マアムのこと忘れた。今はジニユアール家にある蔵書の目録を作ることと、天界の伝説を書き連ねた収集本を読み漁る日々だった。

「本当に天界に行く気なのか、アバン」

ソファに寝転がり、落ちていく夕日を見つめるアバンに問うと、最近では幼いような表情を見せる彼が笑みを見せて「勿論」とうなずく。

「わたしは、天界の住人となるのですよ、ヒュンケル。大いなる神の御許に赴き、神に仕えるために」

そうして、指を一本立てて天井を指さした。

「天から貴方方を見守っていますからね。寂しくなったら空を見上げてください」
それから、すっと立ち上がると部屋から出ていった。すでにジニユール家の蔵書の目録は完成し、彼に残されたものはヒュンケルの「真意」を分かってもらうだけだったが、幾ら言葉を重ねてもヒュンケルは信じてくれないと、最近では諦めの境地だ。

アバンと入れ違いになるようにポップが夕飯の用意を持って部屋の中に入ってくる。ヒュンケルの前に暖かなスープの入った皿を置いた。

「今日も取り合えず、忘れられずに済んだな」

「今日はな。明日は忘れられてるかもしれない」

「それなんだがよー」

ポップは言う。ヒュンケルの前にどつかと腰を下ろすと、パンを手にとって齧りついた。

「オレなんかより、ずーっと付き合いの長かったフローラ様のことは忘れてるん

だよなあ」

それは以前、ジニユール家の壁に掛けられていたフローラの戴冠式の肖像を見て「随分と綺麗な人ですね」と話し始めたのが最初だった。

「なーのに何で、付き合いたった一年のオメーが忘れられずにいんだ？」

「さあな。それこそオレの方が聞きたい」

ぶすつとした表情を崩さないまま、ポップは皿に盛られたワインナーへとフォークを差して豪快にかぶりつくと、ようやくヒュンケルも食事を始める。ちなみにアバンは既に食事という概念を無くしたようで、あれほどに天界での食事を楽しみにしていたというのに、これをエサにアバンを天界に誘っていたのだと思うと、酷い詐欺だとポップはわめいた。

「――明日でちょうど二週間だな」

「そうだな」

「アバン先生、行っちゃうのかなあ」

「あの様子では、喜んで行くだろうな」

いやだいやだと駄々っ子のように首を振るポップだが、意を決したように顔を上げると「絶対、阻止する」と宣言した。

「どうやって」

「アバン先生、言っていたよな？ 行く日は空に道しるべが浮かぶって。自分だけに見える門をくぐって天界に行くんだって——なら、おれが飛翔呪文で先生追いかけて、みっともなく縋りついて引きずり落とす！」

「出来るのか？」

相手は天界人だ。人知の及ばないような仕掛けでアバンを連れ去っていくかもしれない。

「それでも！ みっともなくしがみつく！ 諦めないのがおれたちアバンの使徒だろ！」

「お食事は終わりました？」

ポップが熱弁を振るったところで、アバンがひよつこりと顔を出した。

「ア、アバン先生っ！」

「お食事が終わったのなら、お酒にしません？ 氷室から冷えたウイスキーを持ってきたのですが」

急に現れたアバンにポップはのけぞり、ヒュンケルは冷静な表情を崩さないまま、師が持参してきたトレイを見返した。

「クツキーも貴方が？」

「ええ、ちゃんとお酒に合うように燻製のチーズで挟んで塩漬けの実も入れたんですよ」

ウイスキーの単語にポップの瞳が光った。ポップの酒豪の血は父から受け継いだようで、かなり強いが、反対にヒュンケルは酒の類は苦手だった。

「——と、思って、貴方にはビールを持ってきました。これなら飲めるでしょ？」言葉の裏に甘えるような響きを嗅ぎ取り、とてもではないが拒否できるような

場面ではないと腹を括り、アバンからビールを受け取った。

「まさか、これが最後の晚餐とか言うんじゃないですよね」

酒が運ばれたことに一瞬、浮かれたポップだったが、明日が最後の日と気付いて、恐々とアバンに問うと、そんなことはありませんよとアバンは言う。

「明日は明日で、別に用意しますし」

「やつば、地上に残る気はないんすね」

「……そうですね、もう、色々と忘れてしまいましたけど、今生はやりきったって思っんですよね」

「そう、なんすか」

「ええ、だから、明日は笑って見送ってくださいよ」

決して意志を翻すことがないと知って、ポップは手の内にあるコップに視線を落とすと、中身を一気に煽った。

「そうそう、その調子。今夜は楽しく過ごしましょうよ」

アバンの言葉にヒュンケルは明るく振舞うつもりはなかったが、自分は本当に後悔はないかと自問自答する。

ずっと、胸の奥にはびこっていた思い。墓場まで持つていくのだと決めていた秘密を、本当に吐露せずに師を見送っていいものか。

一気に飲めよという弟弟子の言葉に煽られるようにしてコップを傾ければ、苦い液体が体の奥へと注ぎ込まれて、視界が狭まっていくのが分かった。

太陽が水平線から顔を出し、海と空とを黄金色に染めていく。遠くにはウミネコの声と優しい風の音。

（あの二人はぐっすりと眠っている。ポップには酒に含ませた眠り薬が効いているし、お酒に弱いヒュンケルは昼過ぎまで眠っているでしょう）

目覚めれば自分達が騙されたことを知り、激昂して自分を誇るかもしれないが、それでいいとアバンは思う。本当に自分は酷い指導者なのだと、だからこそ、この世から消え去るべきなのだと本気で思っている。

アバンはジニユアールの城の塔にある小さなベランダの柵の上に立ち、世界が輝くのを目に焼き付けていた。

——きつと、ここよりも美しい場所などない。

だのに、自分は今日、旅立つのだ。

体はどんどんと軽くなっていくのに、胸の奥にある思いだけが重くて、辛くて、早く世界を離れたかった。

雲から幾条ものの光が差し込む——天使の階段だ。

アバンは今では体に馴染んでいる羽を広げ、深呼吸をゆつくりと繰り返す。

——きっと、大丈夫。これまでだって、何度も練習をした。

胸の奥に重い楔はあるが、飛べる筈。

羽を大きく羽ばたかせると空気が足元で舞い上がるのが分かる。何度か羽ばたきを繰り返している内に「行ける」という思いが強くなり、次の瞬間、アバンの足は柵から離れていた。

飛べた！

羽ばたくを繰り返すたびに心の奥が軽くなる感じがする。それが嬉しくて白の上空を何度も旋回していると、脳裏に声が聞こえる——門をくぐれ、と。

「はい、今、すぐお傍に」

アバンは羽を大きく羽ばたかせて光のはしへと向かう——筈だった。

「アバン！」

声のする方へと反射的に振り向くと、そこにはベランダにヒュンケルの姿があった。

「行くなアバン！」

ヒュンケルはベランダから身を乗り出し、大きく腕を開いてアバンを呼んでいた。

「オレの秘密を知らないままに行くのか！ お前がオレに植え付けた傷を知らないままに行くのか！」

「傷、を？ なに？」

それはヒュンケルの父、バルトスを殺めた傷だろうか？ 一瞬だけ、アバンの中に暗い影を落とすが、ヒュンケルはそれを否定する。

「違う違う！ オレが貴方に囚われたままといいことだ！ 貴方はオレの中で二十余年も居座り、憎しみも悲しみも、愛情も何もかも教えたくせに、傷を残したくせに、それを無視して逃げるつもりか！」

「でも、私には罪が」

「罪が何だ！ あなた一人に負わせることなどオレが許すと思っているのか！」
胸の奥が重くなる。今日の日まで軽くしようと努力していたのに、一気に重くなつてアバンは戸惑つてしまう。

——そもそも、私はなぜ、ヒュンケルを忘れられないのか？
答えは分かっていたが、形にすることで天界へと逃げる手立てを失うのが怖かった。

「戻ってきてくれ、アバン」

「ヒュンケル」

真つすぐ見つめてくるヒュンケルの頬に、一筋の涙が流れる。どんな苦境にも

あつても自分には見せなかつた涙が、白晳の頬へと流れる事實にアバンは一瞬、言葉を失う。

「愛している！ アバン！ 貴方が罪人だというのなら、オレも罪人になろう！だが、償うのは天界じゃない！ 地上で人という業を負いながら全うするんだ！」アバンの視界が揺れる。後から後から湧き出てくる「涙」は「人」の証だ。両手で顔を覆い、嗚咽する言葉を堪えながら答えを探す。

「……では、私の罪を聞いてくださいますか？」

「いくらでも」

胸の奥にある愛が形になる。

子供がする砂遊びのように、形になるたびに崩していたそれが、もう耐えられないのだと叫んで喉元からせり上がってくる。

「貴方は私の弟子で、養い子です。一方、私も国民の期待を背負った王であり、フローラ様を妻としました。なのに、私の中に宿った想いは重く、許されるもの

ではなかった、——だから、殺したんです。何度も何度も……。なのに消せなかった。だから天界に行くことはチャンスだと思ったのです。もう、貴方を忘れるように、これ以上、罪を重ねないように……。なのに」

白い太陽を背にしてアバンは真つすぐにヒュンケルへと視線を降り注ぐ。羽は崩れ始め、何十もの白い羽が宙を待っていた。

「貴方を愛しています。ヒュンケル」

「アバン！」

途端、体は重力を取り戻す。がくん、とアバンの体は地面へと落下し始めていた。

「アバン！」

ヒュンケルは咄嗟にベランダから空へと飛び、アバンの体を捕まえると腕の中に包んで背中を丸めた。

刹那の時。だが、運よくヒュンケルの体は途中にある木の枝へと引っ掛かり、

地面への激突を防いでくれた。

「ヒュンケル！」

ヒュンケルの腕の中で状況を察したアバンは声を上げるが、顔中、引っ掻き傷を受けたまま、ヒュンケルは大丈夫だと言うと、片手でアバンの体を抱き、もう一方で木の枝をしっかりと掴むと、振り子のように体を揺すって地面へと降り立った。

「ごめんなさい！ ヒュンケル！ 私の所為でこんな」

ヒュンケルの顔や髪に付いた葉や枝をアバンは払ったが、相手は呆然とした表情のまま見返すだけで、あんまりにも黙り込んでいるので、どこか頭を打ったのかと心配していると、胴を両手でつかまれて高く抱え上げられた。

「ちよっ！ なんですか！」

「ああ、重い。重いぞ、アバン。人の重さだ」

「あまり重い重いと言わないでくれますか？ 太ったように聞こえるじゃないで

すか」

「太ったなどとは言っていないが？」

「言っていないせんがっ！」

「ああ、良かった。人に戻ったんだな、アバン」

「ヒュンケル」

そのまま、ヒュンケルは腕を緩めてアバンの体を引き寄せると、アバンの方から腕を差し出され、肩の上で抱きしめる。

「これで二人ともに罪人なのは確実だな」

「ええ、私は国民を裏切った罪人で教え子を貶めた」

「貶めてなんかないだろう？ オレはずっと貴方が好きだった。愛憎ともに全ての感情の向かう先は貴方しかいなかった」

「貴方の救世主たる立場を汚し、未来を閉ざしてしまった」

「救世主などと、オレに言わせれば屑物だ。オレは元々は不死騎士団の団長で

あり、幾千、幾万もの人間の命を奪ってきた罪人だ」

「でも、それは大魔王戦でダイくん達を助けたことで禊ぎを受けました」

「ダイだから……貴方の弟子だからこそですよ。そこに大きな大義はない。その前に貴方の言う『汚れ』とは何ですか？」

「えつと、あの」

「オレの胸は歓喜ではちきれそうになっているというのに。貴方に愛されているというだけで、このまま天国へと昇る心地だというのに、貴方は『汚れ』だと言うのか？ 愛は至上の想い、目には見えない宝だと説いてきた貴方が？」

「そこまで言われるとアバンには何も言い返せない。ふくつと頬を膨らませると、『意地悪ですね』と拗ねた声を出した。

「では、優しい先生に質問、宜しいですか？」

「はい、なんですか？」

「確かに愛は目に見えないが、表す方法がある筈です。それを示して下さいませ

んか？」

ヒュンケルの言葉にアバンの頬はぼつと赤くなるが、次の瞬間には挑むようにして相手の瞳を覗き込んだ。

「そこまで言うのなら。一番、簡単な愛情表現の一つです」

アバンは薄く笑って両手でヒュンケルの頭を抱きかかえると、その唇へと自分の唇を押し重ねた。

一瞬、軽く触れ、次に視線を絡めると、今度は深く唇を重ね合う。

そうして、どれくらいの時が経ったのだろう。頭上で鳴くウミネコの声に気が付いて顔を離すと、お互いに相手の顔を覗き込んで笑いあった。

「さて、まずは下ろしてください。貴方も腕が痺れたでしょう」

「とんでもない。いつまで経ってもこうしていたいですよ」

「さつきまで重い言っていたくせに」

だが、いつまで経ってもそうしてられないことはヒュンケルにも分かっている

たので、素直にアバンを地面へ下ろすと、彼と同じ方向へと目をやる。それは昇ってくる太陽に掻き消されていく天使のはしごだった。すでにアバンの背にあつた羽はバラバラになり、まるで雪のように辺り一面に散っていた。

『惜しい、と思いますか？』

『いえ、別に』

『最高の福利厚生と最上の料理があつたのに？』

『でも、貴方がいないでしょ？——それにね、私の想いはおもりとなって、でも、決して手放せない重みだった。それがいつでも胸の中にあつた以上、私は天界人の資格がなかったってことなんですよ』

『ええ、貴方は『人』だ』

『しかし、これからどうしましょうね。人であるからには地上で暮らしていかなければならないのですが』

おどけたように言うアバンに、ヒュンケルは笑って答えた。

「何処へでも好きなように。きっと、貴方ならどこの土地でも上手くやるでしょう？ オレは貴方の行く先なら何処へだつて付いていきますよ」

「これは酷い。天界へ行くチャンスを潰したくせに、いざ、展望を聞いたら何もないとは」

「展望が何も無い、というより、貴方さえオレの世界にいれば他には何もいらなさ過ぎて、いい案が思いつかないだけです」

「おまけに他人に責任転嫁。これは再教育のし甲斐がありますね」

言い合いしながら互いに視線を絡めると、次には声を張り上げて笑いあつた。「では、まずは逃げましょうか。何せ、私は罪人なんです」

「いいですよ。付き合います。たとえ、逃亡先が世界の果てだろうと魔界だろうとね」

ヒュンケルの言葉にアバンはぼん、と手を叩いた。

「いいですね、魔界。どうせ天界人との約束も反故になっちゃいましたし、何と

「いつでも貴方の第二の故郷です」

「では、街で装備を揃えて旅立ちましょうか」

「その前にごはん、食べませんか？ 人に戻った途端、すっごく、お腹が空きました。カールの城下町の外れにいい定食屋さんがあるんですよ」

「いいですね。では、可哀相な弟子が目覚める前に」

二人はくすくすと笑い合うと指を絡めて握り、アバンが瞬間移動の呪文を唱えると一条の光となって森の外れへと飛んでいった。

可哀相な弟子の元には一通の手紙——天界行きは諦めちゃった。でも楽隠居の夢は続きますので探さないでくださいという冗談めいた言葉を残し、アバンは——そしてヒュンケルの二人は、人々の前に姿を現すことはなかった。

END